

第4回ヨーゼフ・ クライナー博士 記念・法政大学 国際日本学賞

授賞式

2019年2月4日 [月] 16時から16時30分

記念講演会

2019年2月4日 [月] 16時30分から17時30分

◆受賞者◆

デンニツァ・ガブラコヴァ

Dennitza Gabrakova

(ヴィクトリア大学ウェリントン[ニュージーランド])

◆受賞作◆

The Unnamable Archipelago:

*Wounds of the Postcolonial in Postwar
Japanese Literature and Thought.*

Brill, 2018.

◆記念講演演題◆

現代史の漂流物

*講演は日本語で行われます

◆開催日時◆

2019年2月4日 [月] 16時から17時30分

◆会場◆

法政大学市ヶ谷キャンパス
九段校舎3階 第一会議室

[所在地: 東京都千代田区九段北3-2-3]

◆参加費◆

無料(どなたでも参加可能です)

◆参加申込方法◆

電子メールまたはお電話で事前に参加の申込みをお願いいたします。電子メールの場合、氏名、所属、電話番号、電子メールアドレスを明記の上、法政大学国際日本学研究所までご連絡ください。お送りいただきました個人情報、参加申込受付以外の目的には使用いたしません。

申込先: nihon@hosei.ac.jp

◆受賞作の概要◆

この著書は、植民地主義にかかわる思想を「トラウマ」や「主権」という問題にそって、戦後日本文学や現代思想を英語で論じた初めての試みである。本書は構成上、「島」というモチーフを手がかりに、数名の重要な戦後作家の作品を分析したものである。その作家は大庭みな子、有吉佐和子、日野啓三、池澤夏樹、島田雅彦および多和田葉子である。それぞれの作家の作品分析を通じて、作品における「島」の空間の造形は、「島国」日本という共同体に対する複雑な問いかけであり、植民地化の経験を経た世界の異なる地域との緩やかな連帯感が彷彿させられている場だと指摘をした。

この問題系に理論的な光を当てるべく、ポストコロニアリズム思想を日本の文脈に位置づけようとしている思想を論考の1つの枠組みに立てた。とりわけ、今福龍太や鶴飼哲の文化評論が「島」や「群島」というモチーフが持つもっとも具体的なレベルからより抽象的なレベルまでの発揮力を中心に、徹底的な分析及び英語訳が施された。その分析を通して、現代日本における沖縄という「島」からの問いかけから、太平洋やカリブ海における世界的なアイデンティティの再構成までの、主権、軍事力、経済力などの戦後日本の歴史の主要な側面を照らし出すことができた。

今福龍太や鶴飼哲は、現代日本における重要な評論家であるにもかかわらず、英語圏で十分に論じられてこなかったことが、本書を英語で執筆する主な理由である。それに加えて、それぞれ異質な性格を持っているものの、文学的に優れている大庭みな子、有吉佐和子、日野啓三、池澤夏樹や島田雅彦の作品にいたっても、英語圏で十分に注目されてなかった事実もある。

それぞれの作品を、「島」・「離島」というモチーフによって結びつけた本書の分析方法は、戦後日本における一種の文学的「群島」として再現することにつながったと言える。多和田葉子による、ヨーロッパの周辺に位置する離島が舞台の『アルファベットの傷口』を、このような文学的群島の中に抱え込む分析によって、多和田文学において十分に論じられてこなかった、「開発」に関わる歴史的な批判力が浮き彫りになった。